

福井県医師会

だより

第586号 平成22年(2010)4月



春爛漫

鯖江市 清水 元博

表紙写真説明：春爛漫

鯖江市 清水 元博

昨年春、天守閣が国宝に指定されている彦根城を訪れました。澄んだ青空のもと、白亜の三重櫓（西の丸三重櫓：重要文化財）と高さ10メートルにもおよぶ壮大な石垣、咲き乱れる満開の桜が印象的でした。

醫 縫 録

QOL と患者心理

災害・救急医療担当理事 榊 原 一 郎



私の専門は皮膚科であるが、日常診療において患者さんのQOL (= quality of life) に苦慮することは、他科に比べて少ないと思われる。

しかし、乾癬とアトピー性皮膚炎では、QOLの問題の生じることがある。乾癬は症状がハデであり、かつ一般の人になじみがないことから、うつるんじゃないかという目でみられることもある。ただ、救いは症状が顔に出にくいことである。

アトピー性皮膚炎も重症では見た目も問題になることがあるが、たいていは皮膚症状がうつろしい、長期にわたって治療を要す、といったところがQOLの低下を招く。投薬でほとんどの場合は症状が治まるが、症状があまり消えない場合もあり、患者さんを悩ませることとなる。

アトピー性皮膚炎の場合は、又、別の問題もよく生じる。まちがった治療(その多くはアトピービジネス)や患者さん自身のあきらめ(放置)によって悪化させてのQOLの低下もある。これは皮膚科をきちんと受診すれば、QOLは大幅に改善されるのであるが。

案外多いのが手湿疹で、どうすればよいかわからずに途方にくれて放置している人も多い。これも皮膚科の門をたたいてくれば治療ができる。手湿疹がうそのように治って感謝されることが多い。あきらめている人の多いのが問題ではなからうか。

閑話休題、私自身が糖尿病を患っており、生活上の注意が大変で苦勞していたが、現在の処方薬でHbA1cが良好となり、ひと安心というところです。糖尿病薬の副作用と思われる消化器症状がひどくて悩まされているが、血糖値が何よりも大事なので、QOLの低下はガマンしている。生活習慣上の努力は最小限ですみ、現在の処方薬に感謝しているところである。生活習慣の厳密な改善のことを思えば、楽ちん。

皮膚科診療をやっていると、患者さんのいろ

んな心理がみてとれる。

診療していて、様々な質問や、～をしてもよいかということをよく聞かれるが、ひとつ感心することがあります。未だかつて「タバコを吸ってもよいか」という質問を受けたことは一度もない。市中病院勤務、開業を通じて、ただの一度もない。

患者さんの心理を考えてみるに、治療のために何か生活上の制限をしてほしいと言う心理が働くようである。あるいは言われたことをキチンと守る気があるけれど、タバコだけは「止める」と言われたら困るので言わないといったところではないだろうか？

喫煙している人に、肺癌のリスクを説いてもダメ。癌になると決まった訳ではないので、自分はならない(と思いたい)。あるいは、ならないでほしいという願望。だれも、交通事故にあわないだろうとバク然と思っているのに似ている。そのくせ宝くじを買う時は、ひょっとしてと思うのであるが。

減塩食が必要になった人や、要介護の人のことを思えば、やせるためのカロリー制限や禁煙など、たいしたことではないと思うのだが、患者さんにとっては現状があたりまえの状態であり、大きな努力はしたくない(あるいはそのように流される)というところか。

生活が豊かになって、ガマンすることに大きな抵抗を感じるようになってきているのであろうか。かく言う私も禁煙はしたが厳密な生活習慣の改善はなかなかできていないが…。

昔は(せいぜい50年ほど前迄は)食料は不足気味で、自動車のように便利なものは普及していなかった。現代人は、みんながみんな昔のお殿様よりもぜいたくをしているという認識が必要ではないだろうか。